

「つとめ」と「かせぎ」

大阪教育大学 島崎 英夫

八月号のこの欄に「開かれた愛郷心」と題して、信州上田市の公民館と学校の取組みを紹介しました。訪問させていただいた折、名湯の評判が高い宿に一泊したのですが、その別所温泉と上田を結ぶ電鉄の鉄橋が、十月十三日の台風十九号による千曲川の氾濫で崩れ落ちた報道写真を見て、心のどこかが壊れるような気持ちになりました。お世話になった方々が難を逃れたことを確かめましたが、取材させていただいた公民館も避難所となり、親しく案内してくださった山口館長さんをはじめ職員の方々は夜を徹して地域の皆さんの安全配慮をされたそうです。わたしが訪問した折にボランティアとして地域に来ておられた公立長野大学の学生さんたちの働きがとくにすばらしく、大学を避難所として地域の人に寄り添った対応をしていたとお褒めの言葉をたくさんもらったそうで、わが事のように嬉しくもなりました。

昔、大阪船場の店々には、ふたつの労働の観念がありました。「つとめ」と「かせぎ」です。「かせぎ」がたくさんあっても一人前と認められません。地震・台風・洪水・火事、死人が出たというとパッと出て行って働く。これが「つとめ」。この「つとめ」ができてはじめて「おとな」として認められたのです。これは、大阪だけの話ではなく、京都育ちの編集者松岡正剛さんも同じことを言っています。いや、町方だけではなく、村方でも相互扶助の「つとめ」が当然だったでしょう。

今年六月、「OECD国際教員指導環境調査(TALIS)2018」の調査結果が発表されて以来、日本の教員の状況に、わたしは暗澹たる気持ちを抱いてきました。

多くの国が掲げる教師像は「社会を良く変革する主体」です。貧困や差別など解決すべき課題は多く、公教育への期待が高まっているのは日本も同様です。

ところが、「TALIS2018調査」では、教員への志望動機を「社会に貢献できる」から、「社会的弱者の手助けができる」からと答える日本の教員の割合は他国より低く、特に経験五年未満の若手でさらに減っているのです。高い志をもつ若者に、教職が敬遠されているのです。「安定した職業であること」や「確実な収入が得られること」を動機に掲げる若い教員が多く、「つとめ」よりも「かせぎ」を重視する傾向を見て取ることができます。そこへ、神戸市の小学校での「教員間のいじめ」報道です。志どころか、知性をも疑わねばならないような事態が現に生起しています。

そんな中、台風による洪水被害はたいへんでしたが、「つとめ」にいそしむ若い人々、SOSに応じて「乞われればひとさし舞おう」という志のある学生たちに会うと凋んだ心が膨らみます。わたしの勤める大学にも、社会的にしんどい状況にある学校や地域に進んで入っていこうとする学生たちがいます。そんな高い志のある教師や若者たちを輩出することがわたしたち大学人の「つとめ」だと自分に念を押しているこの頃です。